



アドバンスト施設による 次世代介護機器導入事例

【施設名】
グループホーム稲城わかば

本日お話しする内容

- 施設概要
- 導入した次世代介護機器
- 導入の手順
- 取組内容（手順 1 ～ 6）
- 導入に関わった職員が機器を活用して良かったと感じたこと
- 取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと
- 次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

施設概要

運営法人	医療法人社団 秀功会
施設名	グループホーム稲城わかば
所在地	東京都稲城市坂浜4-8-2
定員	18名
平均介護度	3.2
職員数	介護職 17名 看護師 2名
特徴	当施設は令和3年9月度に開設した認知症対応型共同生活介護です。稲城市の武蔵野の面影が残る高台に2階建・2ユニットの施設です。 施設基本理念（3モットー）は『思いやり・気づき・きづな』



導入した次世代介護機器

メーカー名	株式会社 いうら
機器名	リフト付きシャワーキャリー (LS-500)
台数	2台



導入の手順

導入の6つの手順

取組期間：6か月
現在3カ月目

取組実施者：3名

手順 1	改善活動の準備をしよう	● 情報収集 ● 取組に対する組織全体での合意形成 ● 実施体制の整備
手順 2	現場の課題を 見える化しよう	● 課題の見える化
手順 3	実行計画を 立てよう	● 導入計画づくり ● 対象利用者の選定
手順 4	改善活動に 取り組もう	● 導入準備 ● 次世代介護機器の活用 ● 小さな改善活動
手順 5	改善活動を 振り返ろう	● 効果検証 ● 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析
手順 6	実行計画を 練り直そう	● 実行計画の練り直し

出典：「介護ロボットのパッケージ導入モデル（改訂版）」をもとに作成

手順 1：改善活動の準備をしよう

取組期間：6月28日～11月27日

手順 1

- 情報収集
- 取組に対する組織全体での合意形成
- 実施体制の整備

● 情報収集

- ・ 東京都福祉保健財団の体験展示コーナー見学
- ・ シャワーキャリー使用経験者へのヒアリング

● 取組に対する組織全体での合意形成

- ・ 施設長からリーダー層が機器導入の打診を受け、挑戦の意思を表明する。
- ・ 職員会議で機器導入を発表する。

● 実施体制の整備

	役 職	チーム内での役割
1	施設長	次世代介護機器導入の決定
2	事務長	補助金申請
3	介護主任	プロジェクト・機器導入におけるリーダー
4	介護職員（1F）	機器使用方法の伝達・使用状況の記録整理
5	介護職員（2F）	同上
6	その他職員	使用状況の記録記載

手順 2 : 現場の課題を見える化しよう

取組期間 : ● 11月 ● 28日 ~ ● 12月 15日

手順
2

● 課題の見える化

原因

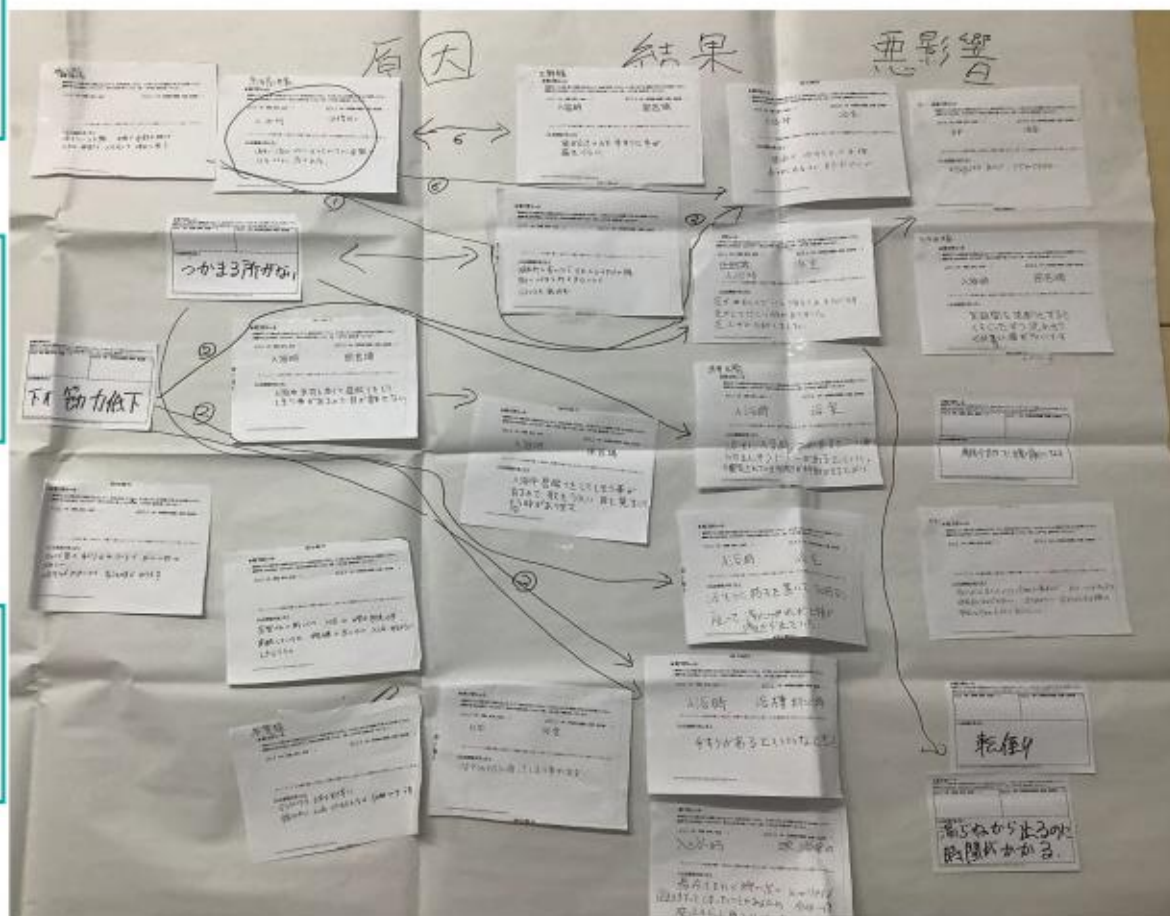
- ・ 掴まる手すりがない
- ・ 利用者の体重が重い
- ・ 湯船が跨げない
- ・ 意思疎通困難
- ・ 利用者の下肢筋力低下

結果

- ・ 転倒事故
- ・ 2人介助で対応している
- ・ 時間がかかる
- ・ 無理な介助を行う (重い体を支える)

悪影響

- ・ 腰痛で職員が欠勤となる
- ・ 効率が悪い (時間がかかる・人員を取られる)
- ・ 利用者が入浴を嫌いになる



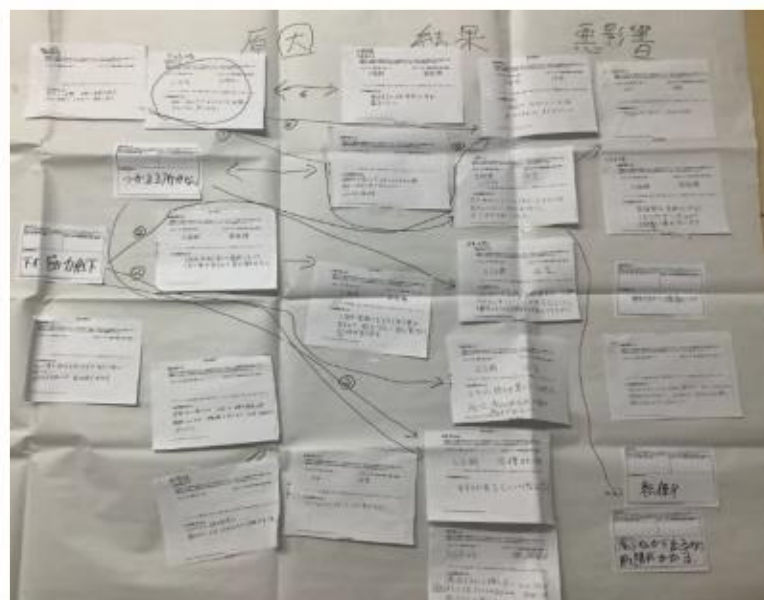
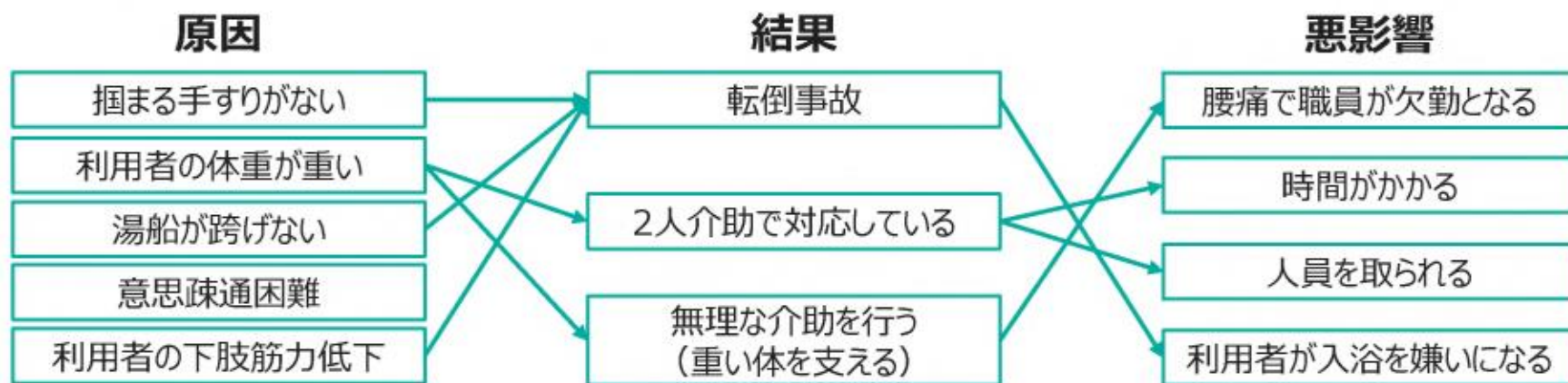
手順 2 : 現場の課題を見える化しよう

取組期間 : 12月1日～12月31日

手順 2

● 課題の見える化

● 課題の見える化



手順 3：実行計画を立てよう

取組期間：11月28日～12月31日

手順 3

- 導入計画づくり
- 対象利用者の選定

● 導入計画づくり

□ 課題解決に向けた道筋

- ・ 高齢化に伴い、ADLが低下し、湯船への出入りが困難となり、入浴介助に係る負担が増すと予想される。実際にシャワー浴のみで終了したり、職員 2 人で湯船の出入り介助をしている現状がある。機器導入により、職員の身体的負担の減少に繋がり、1人対応での介助が可能になることが見込まれる。そして浴室内での事故の減少にも期待する。

□ 導入する次世代介護機器

- ・ リフト付シャワーキャリー

□ 成果指標

- ・ 職員の介助体制（2人体制→1人介助が可能になった職員の数）
- ・ リフト付シャワーキャリー導入後、アンケート調査を実施し、入浴業務のストレス度を測る。

手順 3：実行計画を立てよう

取組期間：11月28日～12月31日

手順 3

- 導入計画づくり
- 対象利用者の選定

● 対象利用者の選定

□ 選定した利用者

- ① 下肢筋力低下により、足の上げ下げ・歩行不安定な人
- ② 体重が重く、介助を要する人
- ③ 認知症状の進行により、意思疎通がとりにくい人

□ 選定理由

- ・ ①②は、身体介助の負担が軽減され、利用者も機器の使用を喜んで受け入れてくれそうだったから。
- ・ ③は、シャワーキャリーに座ることで、容易に入浴業務が遂行できそうだから。

□ 選定する際に留意した点

- ・ トップダウンではなく、職員皆と話し合い対象者を選定した。（当事者意識を持つため）

手順 4：改善活動に取り組もう

取組期間：11月28日～12月31日

手順 4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

● 導入準備

1. 職員会議で機器を導入予定していることを周知する

- ・ 職員の入浴介助に対する負担について話し合う。
 - ①浴槽の出入りに係る身体介助の負担。(腰痛など)
 - ②入浴を理解できない、または拒否ある利用者の介助に対して、精神的ストレスがある。
- ・ 話し合いで良かった点・悪かった点
 - 良かった点・・・各々職員の悩みを共有できたこと。
 - 悪かった点・・・新しい試みに対して、臆する職員がいる。

2. プロジェクトチームを立ち上げる

- ・ 年齢の若い職員をプロジェクトメンバーに選んだ。
- ・ 役割分担を決める
- ・ プロジェクト会議の日程及び活動内容を決める

3. 研修

- ・ メーカーから使用方法の説明を受ける

手順 4：改善活動に取り組もう

取組期間：12月1日～5月31日

手順 4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

● 次世代介護機器の活用

□ 「効果的に活用するコツ」

- ・ 研修で使用方法の説明を受けた職員は、どんどん機器を活用する。
- ・ 機器の使用方法を習得した職員は、他の職員に業務の中で実践で伝承していく（OJT）
- ・ 「機械が苦手」という職員を優先して、機器の使用体験を積んでもらう。

□ 「効果的に活用できなかった原因」

- ・ 使用方法をしっかりと理解しないまま、活用したことでトラブルが発生した。そのトラブルが発生した時に適切な対応が取れなかった。
➡マニュアル書・手順書の作成が出来上がっていなかったことが原因。

手順4：改善活動に取り組もう

取組期間：12月1日～5月31日

手順4

- 導入準備
- 次世代介護機器の活用
- 小さな改善活動

● 小さな改善活動

□ 改善活動の内容

- ・ 機器の使用を数多く積むことで、とても簡単に操作できることを知ってもらう。（機器使用に不安な職員を繰り返し誘って、一緒に実践していく。）
- ・ 業務負担軽減の体験を実感していく。
- ・ プロジェクトチームの会議を短い時間（5分）でもいいので、週1回以上設ける。
- ・ 速やかにマニュアル書・手順書の作成を完了する。

□ 改善活動の共有方法

- ・ 全職員は、機器を使用した際の利用者の様子を介護記録に記載する。プロジェクトチームは、その使用した際の記録を整理して、良かった点や問題点を発表し、課題の解決に当たる。



手順 5 : 改善活動を振り返ろう

取組期間：12月1日～5月31日

手順
5

- 効果検証
- 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析

● 効果検証

□ シャワーキャリー導入後のアンケートを2回実施

①令和6年2月実施

シャワーキャリー使用におけるストレス度アンケート グループホーム稲城わかば		職員17名中 15名回答	
質問		はい	いいえ
1	シャワーキャリーの使い方を学習した。教えてもらった。	15	0
2	シャワーキャリーの使い方が分かる。	15	0
3	シャワーキャリーを実際に使っている。	14	1
4	利用者の浴槽の出入りが安全になった。	14	1
5	入浴介助の時間が短縮した。	14	1
6	職員の入浴介助の負担が軽減された。楽になった。	14	1
7	浴槽に入る時と出る時は一人介助でできる。	14	1
8	シャワーキャリーを使用して「怖い」「事故が起こる」と思ったことがある。 コメント []	13	2
9	シャワーキャリーを使用して不都合なところがある。 コメント []	12	3
10	入浴業務が楽になった。	0	15

②令和6年11月実施

シャワーキャリー使用におけるストレス度アンケート グループホーム稲城わかば		職員15名中 10名回答	
質問		はい	いいえ
1	シャワーキャリーの使い方を学習した。教えてもらった。	10	0
2	シャワーキャリーの使い方が分かる。	10	0
3	シャワーキャリーを実際に使っている。	10	0
4	利用者の浴槽の出入りが安全になった。	10	0
5	入浴介助の時間が短縮した。	7	3
6	a,職員の入浴介助の身体的負担(腰痛など)が軽減された。 楽になった。	10	0
	b,職員の入浴介助に対する心理的負担(ストレス度)が軽減された。	10	0
7	浴槽に入る時と出る時は一人介助でできる。	10	0
8	シャワーキャリーを使用して「怖い」「事故が起こる」と思ったことがある。 コメント []	8	2
9	シャワーキャリーを使用して不都合なところがある。 コメント []	6	4
10	入浴業務が楽になった。	7	3

＊ 機器導入前は、入浴を2人介助で行っていたことが業務効率化の妨げになっていた。
問7の2月・11月のアンケート結果で導入後は、ほぼ全職員が1人介助が可能と答えている。

手順 5：改善活動を振り返ろう

取組期間：12月1日～5月31日

手順 5

- 効果検証
- 上手くいった点、いかなかった点の整理・分析

● 上手くいった、いかなかった点の整理・分析

□ 上手くいった点・その要因

- ・ 入浴業務は職員全員が受け持つことになるので、当事者意識を持って取り組むことができた。
- ・ 機械に苦手意識を持つ職員でも、実践で教えることで、簡単に操作することができた。
- ・ 2人介助で行っていた業務が、機器を使用したことで1人介助で対応することが出来た。

□ 上手くいかなかった点・その要因

- ・ マニュアル書・手順書の作成、及びプロジェクト会議の開催が遅れた。役割分担と活動内容が明確に情報共有できなかった。
- ・ 「自立支援の観点から、使用しないほうがいいのでは。」という理由で機器を使用しない職員がいた。

手順 6：実行計画を練り直そう

取組期間：12月1日～5月31日

手順 6

- 実行計画の練り直し

● 取組内容の見直し

□ Before

- ・ 自立支援の観点で、機械を使わないで入浴業務を行いたいという思いがあり、厳しい基準で機器使用対象者を選定していた。

□ After

- ・ 機器の使用は職員の負担軽減が目的であることを改めて周知した。理解した職員は、抵抗することなく機器を活用するようになった。
また、対象者を制限しないで選定することとした。(但し、初めて機器を使用する利用者の時は、上長に報告することとした。)

導入に関わった職員が機器を活用して良かったと感じたこと

- 機械操作が苦手な人でも、とても簡単に操作する事が出来た。
- 2人介助で対応していたことが、1人介助でできるようになった。
- 重い人を抱えなくとも、機械がしてくれるので身体的負担が無くなった。
- 機器操作を教え合い、入浴業務の悩みを話し合う中で職員間のチームワークが良くなり、孤独でないことを知った。
- 新しいことを始める時は、必ず反発する勢力が出る。しかし、取り組みを継続していく過程で、「機器の使用は身体の負担の軽減になる」ことを知り、1人また1人と共感者が現れ、いつしか多数が味方となっていった。

取組を通じて気づいたこと・重要と感じたこと

- 困難な課題に対して、職員全員で解決に向けた取り組みを話し合うことで充実感を味わうことができた。悩んでいるのは自分だけではない。チームで働いていることを実感できた。
- 新しいことを始める時は、必ず反発する勢力が出る。しかし、取組を継続していく過程で、1人また1人と共感者が現れ、いつしか多数が味方となっていった。
- 準備が大事だということを思い知った。段取りが整っていないと、実践に移行できず、途中で止まってしまい、プロジェクト進行のリズムが悪くなってしまう。
先ずは、マニュアル書・手順書を事前に作成し、準備すること。
プロジェクトチームの第1回会議を早期開催し、役割分担・活動内容を決めてしまう。

次世代介護機器導入を考えている事業所の方へ伝えたいこと

- 介護職員の業務の負担が減少すること・楽になる事は、ケアの質の向上に矛盾しない。
- ハード面（次世代介護機器）を使いこなすことで時間配分の合理化と身体的・精神的ストレスの減少につながり、ソフト面（傾聴の時間を取ることや自立支援の取組み）を充実させることができた。
- 当施設が導入しているリフト付シャワーキャリーは、操作が簡単で安全に入浴を実施できる機器である。
- 職員が使うと楽になり、利用者が使うと気持ちよくなる。
- 事業所のトップ・リーダーの強い思いと執念が職員の行動を変え、共感の輪を広げる原動力となった。